

國學院大學學術情報リポジトリ

国際研究フォーラム「アジアの宗教文化：
モダニティの中での相互変容 Religious Cultures in
Asia : Mutual Transformations through Multiple
Modernities」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000538

国際研究フォーラム「アジアの宗教文化——モダニティの中での相互変容 Religious Cultures in Asia : Mutual Transformations through Multiple Modernities」

2018年10月20日、日本文化研究所の主催により、国際研究フォーラム「アジアの宗教文化——モダニティの中での相互変容 (*Religious Cultures in Asia: Mutual Transformations through Multiple Modernities*)」が開催された。

近現代のアジアは、それぞれの国や社会、あるいは地域において固有の modernity (その意味でそれは複数形の modernities であることになる) を経験してきているが、その歴史的展開を受けて、宗教文化もまた変化を遂げてきている。

他方で、その変化は必ずしも内的な要因からのみ生じたわけではない。メディアや技術の発展とも結びついて、宗教文化は様々な形で越境してきたのであり、かつそれによって相互に影響を与えながら変容してきたのである。

本フォーラムは、このような越境や相互変容といったことを基本的な視点として、近現代のアジアにおける宗教文化について報告を行い、ワークショップ的な形で議論を深めることを目指して開催されたものであった。

また本フォーラムは、国際学会での発表経験がない若手研究者に、その前のステップとして英語で発表・議論する機会を提供することも一つの目的としていた。学内外に広く報告者を募り、最終的には様々な国籍・専門分野の12名が報告を行った。以下、報告の概要を記す(各報告題目の日本語訳は筆者の文責による)。

基調報告 (Keynote Lecture)

ラインハルト・ツェルナー氏(ボン大学)の基調講演は「ええじゃないかと日本における宗教的モダニティ *Eejanaika* and Religious Modernity in Japan」という題で行われた。ツェルナー氏は「ええじゃないか」という歴史上の出来事について、神札と祝祭を基本的な要素とし、多様なカミや仏などが関わるものとして描かれていたこと、またある種の富の再配分として機能していたことなどを指摘した。続けて「ええじゃないか」から近世・近代の日本の宗教の型を検討するとし、前者ではより個人的な「私 I」と、より共同体的な「私たち We」の多様な宗教実践が併存していたとしたのに対して、後者では、とりわけ国家との関わりにおいて「私たちの一員としての私 I as part of We」に宗教実践が一元化され、ある宗教伝統がそれを排他的に担うことが前提とされると論じ、さらにこうした変化を東アジアの文脈において横断的に検討することが可能ではないかと述べた。



セッション1：日本の新宗教とアジア (Session 1: Japanese New Religions and Asia)

セッション1ではまず三浦隆司氏（アメリカ・アリゾナ大学）の報告、「大本のお筆先におけるアジア像（The Vision of Asia in Ōmoto's Ofudesaki）」が行われた。三浦氏は、近代日本の宗教運動が日本とアジア・世界との関係をいかに概念化したのかという問題意識から、大本の出口なおの「お筆先」と出口王仁三郎の著作を取り上げ、アジアに対する民族中心主義と霊的博愛主義という二つの対照的な表現の関係について論じた。

続いて黄約伯氏（台湾中央研究院）は「戦後台湾における天理教の文化内受容（The Inculturation of Tenrikyo in Postwar Taiwan）」と題して、天理教が1967年から台湾で行ってきた布教活動を取り上げて報告を行い、戦後の台日関係や、天理教が政治的・社会的・医療的側面から台湾人に対して持ちえた魅力といった観点から分析を行った。

セッション2：日本のナショナリズムと想像の「アジア」 (Japanese Nationalism and Imagined "Asia")

セッション2では最初にダーヴィッド・ヴァイス氏（立教大学）による報告、「日本の起源神話——近世日本のアイデンティティにおける中国理解の変化とその影響（Founding Myths of the Japanese State: The Changing Perception of China and its Influence on Early Modern Japanese Identity）」が行われた。ヴァイス氏は近世初頭の日本の儒者が唱えた呉泰伯論が、やがて国学者らによって批判され、天照大神と天皇の血統を中心とする新たな建国神話が求められていく過程について考察した。

齋藤公太（國學院大學研究開発推進機構）は「漢意の変容——明治国学における後期水戸学の思想の受容（The Transfiguration of

Karagokoro: the Reception of the Mito School Thought by National Learning in the Meiji Period）」と題して、国学批判を含んでいた後期水戸学の思想が、明治期以降国学者たちに受容されていった過程とその背景について報告した。

西田彰一氏（日本学術振興会）は「満州における笈克彦の活動（Activities of Kakehi Katsuhiko in Manchuria）」と題して報告を行った。笈克彦は独自の神道哲学で知られる人物だが、満州国で自らの思想を広めようとした活動は失敗に終わった。笈の言説が現地の人々や日本の政府の官僚に受け入れられなかった背景について西田氏は考察を行った。

セッション3：日本宗教をめぐる様々な焦点 (Session 3: Various Focuses about Japanese Religions)

セッション3の最初の報告は高瀬航平氏（東京大学大学院）の「近代日本の宗教文化における記念碑の意義（Significance of Monuments to Religious Culture of Modern Japan）」であった。高瀬氏は1870年代に海外から日本に輸入された「記念碑」が、当時の社会的状況における「宗教」との関わりの中で果たした役割について論じた。

次にマテヤ・ジャビェク氏（筑波大学大学院）が「日本の武道と宗教の関係の再検討——三峯山と極真空手のケーススタディ」（Reconsidering the Relationship between Japanese Martial Arts and Religion: Case Study of Mt. Mitsumine and Kyokushin Karate）と題して報告を行った。近代格闘技は宗教的伝統を必ずしも必要としないが、実際にはそのような伝統が格闘技の日常実践の中で依然として意味を有している。ジャビェク氏は極真空手と三峯山の間を具体例として取り上げ、その意義について考察した。

グエン・トゥ・ハン氏（ハノイ国家大学）は「日本における土地神信仰——ヴェトナム

との比較」(The Worshipping of the Tu Di Gong in Japan: A Comparison with Vietnam)と題して、日本の神道の中でも特に人々の間で広まっている土地神への信仰を、ヴェトナムの事例と比較して考察を行った。

セッション4：アジアの宗教文化における現代の諸問題 (Session 4: Contemporary Issues in Religious Cultures in Asia)

セッション4ではまず阿部哲氏(長崎大学)が「環境をめぐるイスラムの議論——現代イランにおける宗教的原理の検討 (Islamic Debates on the Environment: An Examination of Religious Rationales in Contemporary Iran)」と題して報告を行った。イランで近年環境問題をめぐって行われている宗教指導者の議論において、近代科学との関係の中でイスラムの教えがいかに解釈されているかを検討するものだった。

次に伍嘉誠氏(長崎大学)が「香港で日本仏教と中国民俗宗教が会う時——中国的環境における創価学会の表象と解釈 (When Japanese Buddhism and Chinese Folk Religion Meet in Hong Kong: Representation and Interpretation of Soka Gakkai in the Chinese Settings)」という報告を行った。呉氏によれば、香港の創価学会は「随方毘尼」という原則に基づく解釈を行うことで、儒仏道の三教一致などを特色とする香港の文化に合わせた布教を実現しているという。

最後にムン・ビョンジュン氏(ソウル大学)が「動員のための時代区分——『韓国新宗教』の宗教的時代区分との比較における『第四次工業革命』言説の言説論的分析 (Periodization for Mobilizing: Discursive Analysis to “the 4th Industrial Revolution” Discourse in Comparison with Religious Periodization in “Korean New Religions”)」と題して報告を

行った。近年韓国の社会経済的言説の中心的地位を占めている「第四次工業革命」論を取り上げ、「時代区分」の言説が持つ人間や資源の「動員」としての機能と、その意味論的基礎について論じたものであった。

結びの言葉 (Concluding Remarks)

すべてのセッションが終わった後、司会を務めた櫻井義秀氏(北海道大学大学院)が結びの言葉を述べた。櫻井氏は「アジアの宗教文化——モダニティの中での相互変容」という主題をめぐり、フォーラム全体を通じて得られた重要な知見として、アジアにおける「文明」の国としての中国の意味や近代日本における記念碑の利用を挙げ、外国のイメージを参照することや時代区分を用いることがモダニティの二つの戦略として考えられると指摘した。

本フォーラムには延べ37人が参加し、各報告の後には英語での活発な議論が交わされた。2019年度には本フォーラムの報告書も刊行される予定である。

(齋藤公太)

